

音を^{たくわ}蓄え、再生する機械

ちくおんき 蓄音機

蓄音機とは、1877年（明治9）にアメリカのエジソンによって発明された音を蓄え、再生する機械のことです。エジソンの蓄音機は円筒式のレコードに針で音溝を刻んだもので、当初は速記の代わりや遺言など言葉の記録が目的でした。



円筒型蓄音機
1920年（大正9）頃

1887年（明治20）に、アメリカのベルリナー（ドイツ移民）が円盤式レコードの蓄音機を開発しました。円盤式は円筒式より収納しやすく、原盤を用いた複製も容易であり、音楽を楽しむため一般家庭に広く普及しました。

日本では、1907年（明治40）に松本武一郎が日米蓄音機製造株式会社（後の日本コロムビア）を創立し、円盤式レコードを再生する蓄音機の生産と販売をはじめました。価格は1台30円で、小学校教員の初任給が8円の時代では、とても高価なものでした。



国産初の蓄音機
1910（明治43）頃

昭和初期になると日本ビクター社等のたくさんの蓄音機会社が誕生したため、日本でも徐々に蓄音機が普及し、1936年（昭和11）にはレコード（SP）の年間生産量3百万枚になりました。1950年代には新しい規格のレコード（LP・EP）が登場し、電気による駆動や音の増幅を行う電気式蓄音機が普及していき、旧式のレコードとゼンマイ式蓄音機は1960年代前半に姿を消しました。

1982年（昭和57）のCD発売以降、レコード市場は衰退し、年間生産量も1979年（昭和54）の2億枚に対して、2012年（平成24）には45万枚になりました。しかし、CDには不可聴域に欠落する周波数帯域があるため、レコードは今でも根強い人気があり、市場から絶滅していません。